

館林キリスト教会 デポジションノート（2007年）

2月 1日 今日の通読箇所 マタイによる福音書 24：32～51

「目をさましていなさい」

終末の預言が確実であることが語られています。いちじくは葉よりも早く花が咲き、実を結び始めるそうです。ですから葉が出てくると実を収穫する夏が近いとわかるのです。同様に、聖書に記されている終末の前兆が見られたら、時が近づいていると知るべきです、ということです。しかし、その日その時は父なる神様だけが知っておられます。イエス様が思いがけない時に再臨なさることについて、ノアの洪水の時の様子と、泥棒の侵入ということが挙げられています。洪水が近いことは、ノアによって知らされていたにもかかわらず、人々は日々の生活に心を奪われていました。また悪い僕は「主人はまだまだ帰ってこないだろう」とたかをくくっていました。忠実な思慮深い僕として主のおいでを待つべきだと教えてくださっています。

2月 2日 今日の通読箇所 マタイによる福音書 25：1～13

「十人のおとめたち」

終末に備える姿として、忠実な僕の姿に続いて、十人のおとめのたとえで思慮深さについて教えられています。ユダヤの婚礼は普通花婿の家で行われるので、花婿は友人と、夕方花嫁の家に迎えに行くということです。花嫁の友は、花婿を迎えるため、いつでも用意していなければならないのです。この時、花婿の到着が夜中になってしまったので、到着と同時に花嫁の家で婚礼が行われたようです。五人のおとめの思慮深さは、あかりと一緒に、予備の油を用意していたということです。あかりは、目に見えるしるしで、主を信じる者たちと世の人々を区別するもので、毎週礼拝を守り主に仕える教会生活、信仰生活をさし、油は聖霊をさすと考えられます。主を待ち望む生活とは、教会生活、信仰生活、日々聖霊に従順に聴き従い崇めつつ生きる生活なのです。

2月 3日 今日の通読箇所 マタイによる福音書 25：14～30

「タラントのたとえ」

このタラントのたとえが、主の再臨に関する教の中で語られていることは意義深い。マタイによる福音書 25 章にある 10 人の乙女のたとえは「だから、目をさましていなさい。その日その時が、あなたがたにはわからないからである。」（13 節）という適用をもって終わっている。それからこのタラントのたとえが語られた。しもべたちは、主人のいない間に、預けられたタラントを用いて主人のために働いていた。したがって、このたとえが私たちに教えているのは、

主イエス様が地上を去られた時から再びおいでになり、清算のために御自身のしもべたちを呼び集められる時まで、クリスチャンが与えられた賜物（タラント）を神のため、いかに忠実に生かしたかということである。

2月 4日 今日に通読箇所 マタイによる福音書 25 : 31 ~ 46
「羊とやぎのたとえ」

マタイによる福音書 25 章 31 節の「人の子が栄光の中にすべての御使たちを従えてくるとき、彼はその栄光の座につくであろう」とあるのは、イエス・キリストが再臨なさる時の光景である。キリストが地上にお出でになった最初の時には、一切の栄光を捨て、私たちと同じ弱い人間の姿でお出でになり、家畜小屋でお生まれになった。けれども、世の終りの時には、すべての御使たちを従えて、栄光に輝いた姿でおいでになる。そして全人類を一人残らず御前に集められ裁かれる。人類最後の大審判である。しかもこの大審判の時には、羊飼いが、間違いなく羊とやぎとをえり分けるように、イエス・キリストは、全人類を正しく、永遠の生命に入る羊の群れと、永遠の刑罰に入るやぎの群れとに分けられる。これは、まことに厳粛な裁きである。

2月 5日 今日に通読箇所 マタイによる福音書 26 : 1 ~ 13
「葬りの備え」

6 節を「重い皮膚病の人シモンのおられたとき」と読み替えて下さるようお願いいたします。イエス様の十字架の死が刻々と近づいていました。イエス様がシモンの家で食事の席についていらっしゃった時、ひとりの女が香油を入れた石膏の壺を持ってきてイエス様に注ぎかけました。高価な香油のささげものをもってしても、イエス様への感謝は尽きない、信仰によるささげものでした。弟子たちは「なんのためにこんなむだ使をするのか」と憤りました。しかしイエス様は「この女がわたしのからだにこの香油を注いだのは、わたしの葬りの用意をするためである」と、十字架の死と葬りの備えという、意味ある時に適った行いで、福音が宣べ伝えられる所では記念として語られると言われたのです。

2月 6日 今日に通読箇所 マタイによる福音書 26 : 14 ~ 29
「まさか、わたしではないでしょう」

十字架の前日の夕方、弟子たちは過越の食事の場所をイエス様に尋ねました。イエス様は弟子たちを遣わして、話してあった人に場所の提供をお願いしました。この食事の時「特にあなたがたに言うておくが、あなたがたのうちのひとりが、わたしを裏切ろうとしている」、こう言われた弟子たちは非常に心配して、つぎつぎに「主よ、まさか、わたしではないでしょう」と言い出しました。ユダも言いました「先生、まさか、わたしではないでしょう」。イエス様を売

り渡したユダの言葉は明らかな偽善でしたが、その夜ゲッセマネの園でキリストが捕らえられると、弟子たちは蜘蛛の子を散らすように逃げ去り、ペテロはキリストなど知らない、と三度否認したのです。そこにわたしがいたらどうだったでしょう。「主を裏切ったのは、わたしかもしれない」ことを心に刻み、お詫びと悔い改めをもって主に従いましょう。

2月 7日 今日に通読箇所 マタイによる福音書 26 : 30 ~ 46

「ゲッセマネの祈り」

最後の晚餐を終えたイエス様と弟子たちは、オリブ山に向かった。その道すがら、イエス様は弟子たちのつまずきと復活について語られた。これは弟子たちがつまずきの後で強められるのを願ったからだ。しかしペテロは、自分だけは決してつまずかないと言い張った。そこでイエス様は「今夜、鶏が鳴く前に、あなたは三度わたしを知らないというだろう」(34 節)と告げた。ゲッセマネの園でイエス様は、苦しみもだえつつ、うつぶしになり祈られた。その祈りは、人間の罪の深さへの悲しみであり、その悩みは、神の審判である十字架の重みに対するものだった。十字架刑は神から引き裂かれる事であり、耐えられない苦しみだ。しかし、この主のお苦しみによらなければ人間の救いは成就しなかった。

2月 8日 今日に通読箇所 マタイによる福音書 26 : 47 ~ 56

「キリストの逮捕」

ゲッセマネの園でイエス様が弟子たちに話していた時、ユダに先導された祭司長たち、剣と棒を持った群衆がついてきた。ユダは「わたしの接吻する者が、その人だ。その人をつかまえる」(48 節)と合図をしておいたのである。愛と信頼のしるしである接吻をもって、恩師を売ったのである。これは、今日も悪魔が光の衣を装って信仰者たちに近づいてくる常套手段だからよくよく注意が必要だ。この時、血気盛んなペテロが剣を抜き、大祭司の僕の耳を切り落とした。イエス様はすぐに、彼の耳を癒してあげたと同時に、「あなたの剣をもとの所におさめなさい。剣をとる者はみな、剣で滅びる」(52 節)と言われた。核の脅威にさらされている世界で、「核を使う世界は、核によって滅びる」という、神様の警告とも読めるのではないか。

2月 9日 今日に通読箇所 マタイによる福音書 26 : 57 ~ 75

「真夜中の裁判」

四福音書によれば、イエス様はこの夜、少なくとも六回の裁判に引き回されました。三つはユダヤ教の裁判で前大祭司アンナスの前で、現大祭司カヤパと議

会の議員たちの前で、夜明け直後の公式法廷で、他の三つは権力者の総督ピラトの前で、ガリラヤ領主ヘロデ・アンテパスの前で、もう一度ピラトの前で。この時の議会の裁判が不法だったことがよくわかります。真夜中に開廷してはならないのに、非合法的な真夜中に行われました。偽証については、マルコ福音書 14 章 59 節に「このような証言も互に合わなかった」とあります。イエス様は沈黙ののちご自身について明確に証言なさり、また、ペテロに関するみ言葉が現実になったことも記されています。

2月10日 今日に通読箇所 マタイによる福音書 27：1～10
「ユダの死」

イエス様を知らないと言ったペテロは罪を悔い改め、主に委ねられた働きを全うし最後は殉教しました。ユダは後悔はしましたが、銀貨三十枚を返した後、悲惨な最期を遂げました。彼にとって、イエス様は「罪のない人」(4節)すなわち、死刑に値するほどの大罪を犯していない人、でしかありませんでした。イエス様に対して罪を犯したので、その罪をイエス様にお詫びするという気持ちにはなっていなかったのです。コリント人への第二の手紙 7 章 10 節にはこのようにあります。

「神のみこころに添うた悲しみは、悔いのない救を得させる悔改めに導き、この世の悲しみは死をきたらせる。」

2月11日 今日に通読箇所 マタイによる福音書 27：11～31
「ピラトの裁判」

イエス様は、「たしかに人の子は、自分について書いてあるとおりに去って行く。しかし、人の子を裏切るその人はわざわいである。」(26:24)と言われた。総督ピラトは、イエス様を取り調べても、何の罪をも見出せなかった。にもかかわらず群衆の暴動を恐れるあまり、イエス様を十字架刑の死に渡したのだから彼にわざわいが及ぶのも当然だ。ポンテオ・ピラトの名は、聖書と使徒信条の告白「ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け」という言葉によって、地上に教会が続く限り、忘れ去られることはない。ピラトは後にサマリヤで流血事件を起こし、自らも裁判を受ける身になったという。ユウセビウスの信仰史によれば、彼は自殺して、その身体はタイバー河に投げ捨てられた、と言われている。

2月12日 今日に通読箇所 マタイによる福音書27：32～44
「イエス様の十字架」

人間の歴史の中で、イエス様の十字架にまさる大きな出来事はなかった。イエス様はヘブル語でゴルゴタ、ラテン語でカルバリという頭蓋骨の形に似ている丘で、二人の強盗と共に十字架にかかられた。ローマの兵士たちは、十字架につけられたイエス様に「にがみをまぜたぶどう酒を飲ませようとした」が、イエス様はそれを飲まなかった。人間のすべての苦しみをそのまま受けとめるためだ。また、十字架の下では、兵士たちがイエス様の着物をくじ引きで分けあっていた。ここで著者のマタイはイエス様の受難についての預言の言葉を引用し、すべては神様のご計画の中で行われ、人間はその事に気づかず、愚かで罪深い行為をしていると強調しているのだ。

2月13日 今日に通読箇所 マタイによる福音書27：45～56
「十字架」

キリストは朝の九時ごろ十字架につけられ、昼の十二時から地上の全面が暗くなって、三時ごろついに息をひきとられました。キリストの十字架上の七つの御言葉のうちの一つが記されています。極度の肉体の苦痛以上に、霊的な暗黒を経験なさっておられたことをこの御言葉は示しています。父なる神様は罪人に怒りと呪いをもってのぞむ審判者としてキリストの前に立たれたのです。最愛のひとり子キリストを「お見捨てになった」のです。キリストはこの暗黒の苦しみを受けてくださいました。「キリストに代って願う、神の和解を受けなさい。神はわたしたちの罪のために、罪を知らないかたを罪とされた。それは、わたしたちが、彼にあって神の義となるためなのである。」コリント第二の手紙、5章20、21節

2月14日 今日に通読箇所 マタイによる福音書27：57～66
「アリマタヤのヨセフとニコデモ」

ヨハネ福音書と読み合わせると、アリマタヤのヨセフはユダヤ人をはばかってひそかにイエス様の弟子になっていました。しかし今彼は、ローマ総督ピラトにイエス様の死体を取りおろしたいと願い出ました。ニコデモはパリサイ人、ユダヤ人の指導者、教師で、かつてイエス様を夜訪問した様子がヨハネ福音書3章にあります。彼は葬りのために「没薬と沈香とをまぜたものを百斤ほど持ってきた。」(ヨハネ福音書19章39節)とあり、沈香はアロエで、百斤すなわち30キロほど持って来ました。そしてこの園にあった、まだだれも葬られたことがないヨセフの新しい墓にイエス様を葬ったのです。こうして彼らはイエス様に対する信仰を明らかにしたのです。

2月15日 今日の通読箇所 マタイによる福音書28：1～10

「イエスはよみがえられた」

エルサレムの園の墓には、キリストがここから甦られたという墓地がある。その入り口には、英語で「主はここにはおられません。彼はよみがえられた」と書いてある。御使はマグダラのマリヤとほかのマリヤに「かねて言われたとおりに、よみがえられた」(6節)と告げた。復活のイエス様も二人の婦人に現れて「平安あれ」と挨拶された。二人の婦人は、愛していたイエス様がよみがえられたことを心から喜び、近寄りイエス様のみ足をいただいて拝した。この二人の婦人はイエス様の十字架の下に立ち、埋葬にも立ち会った。だからイエス様は、彼女たちに最初の復活のお姿を現されたに違いない。また弟子たちにはガリラヤへ行くようにと告げる事を命じた。

2月16日 今日の通読箇所 マタイによる福音書28：11～20

「世界伝道への命令」

イエス様がよみがえられたことは、墓の番人たちによってすぐ祭司長たちに報告された。祭司長たちは相談をし、番人たちに金を与えてデマを流した。それがユダヤ人の間に広まった。一方弟子たちは、婦人たちに告げられたようにガリラヤへ行き、復活のイエス様と再会し、礼拝した。勿論まだ信じられない者たちもいた。そうした弟子たちにイエス様は、世界伝道への命令を与えられた。全世界の人々に福音を伝え、洗礼を受けなさいということだ。そして、イエス様が一番言いたかったことは、人々を聖書のみことばによって訓練し、弟子となるようにする事だ。決して洗礼を受けたからそれでおしまいというのではなく、主のために役立つクリスチャンとなり、神の栄光を現す事が、私たちに語られた主旨である事を忘れないようにしたい。

2月17日 今日の通読箇所 ルツ記1：1～14

ルツ記 1章1～14

士師記の残りの三章は、その時代の道徳的衰微の記録で、恐ろしい犯罪とこれによって引き起こされた内戦が記してある。この部分は省略する。宗教的脱線混乱、道徳的衰微と内戦の三つの記録の次に、ルツ記 がある。この書は、そんなに恐ろしい墮落の時代にも一部にはまた、こんなに純粋な敬虔な人々もいたことを物語っている。ことにルツの証は美しい。やがてこの敬虔な家族から、ダビデ王が出るのである。

2月18日 今日の通読箇所 ルツ記1：15～22

ルツ記 1章15～22

オルパ・ルツは二人とも、しゅうとめナオミと共にゆくことを、泣いて頼んだが、ナオミの情理ともなう説得によって、オルパはあきらめて国に止まった。しかしルツは強情強固にナオミとはなれず、共にベツレヘムに行ったのである。ルツはどんなに、言われても、孤独のナオミを一人去らせることは忍びなかった。またルツは、この家族によって本当の信仰を学んだのであったから、それを棄てて異邦に止まることは、それこそ絶対にできなかったのである。

2月19日 今日の通読箇所 ルツ記2：1～13

ルツ記 2章1～13

ボアズはベツレヘムの有力者、富農であって、刈入れのとき「落穂まで細かく集めないで、それは田畑を持たない貧民に自由に拾わせなさい」という、いわゆる「愛の律法」に従い、貧民に対してやさしかったが、ルツには特に親切にした。それはかねて、ルツの信仰と、母親に対する献身のうわさを聞き、知っていたからである。悪い評判は案外早くひろがるものだが、良い評判もやはりひろがり、同じく善良な人の興味好意を引きつけるのは、ありがたい。

2月20日 今日の通読箇所 ルツ記2：14～23

ルツ記 2章14～23

ボアズのルツに対する親切は、大麦刈りから小麦刈りまで、一ヶ月以上つづき、ルツはその間、もっぱらボアズの畑で落穂を拾った。ナオミは夫の死後貧しくなったときに、自分の畑を人手にわたしてしまつたらしい。さてそういう場合に、近い親戚で力のある者に、土地を買い戻してやる義務があるのだが、実際問題としてなかなか実行はむずかしかった。ボアズは親戚なので感心なルツを見るにつけその義務をも感じたが、同時にまた彼女に次第に愛情を抱くに至つた。

2月21日 今日の通読箇所 ルツ記3：1～14

ルツ記 3章1～14

毎日のルツの報告から、ボアズのルツに対する好意を感じとつたナオミが、ルツに教えて取らせた行為は、今日の道德標準から見てかんばしいとは言えない。しかるにこの場合のボアズの態度は立派だった。感情が主で思慮の浅い女性につけこむことはしなかった。彼も、ルツとの結婚を決意したらしいが、今はやさしく注意深くルツを去らせた。そして、結婚の手続きをとることを約束した。世の中には、女性をだましてもて遊ぶ男も多いのに。

2月22日 今日の通読箇所 ルツ記4：1～17

ルツ記 4章1～17

ナオミ、ルツにはボアズよりももっと近い親戚がいたので、その人の方が親戚の義務も優先する。ボアズはまずその人と交渉した。彼は土地は買戻してやってもいいが、ルツの責任をとることは困ると言って、ボアズに一切をまかせることになった。ボアズはこの間祈りつつ、結果を神のみ心にゆだねていたが、今はいよいよルツと結婚するように道が開かれて来たのである。その孫に有名なダビデ王が生まれることになるのも、決して偶然ではない。

2月23日 今日の通読箇所 サムエル記上1：1～11

サムエル記上 1章1～11

ラマタイム・ゾピムの有力者エルカナは、妻のハンナを深く愛していたが、その腹に子供が生まれないので、更にペニンナをめとり、ようやく子供をもうけることができた。エルカナの愛は変わらないとしても、自然、立場の差というものが次第に生じ、ペニンナから、あなどりをうけ、ハンナは悲しみに耐えなかったがその悲しみは深い祈りにそそぎ出されたのである。しかしその祈りは単に一女性一家庭の問題に止まらずやがて全イスラエルの回復復興につながる事となる。

2月24日 今日の通読箇所 サムエル記上1：12～28

サムエル記上 1章12～28

ハンナは、この子が祈りの答えとして与えられたのを記念して、彼を「サムエル（主は聞かれた）」と名づけた。それと共に、いわゆる一つぶだねで、目の中に入れても痛くない程かわいかったのに、この子を私物視、愛玩物視しないで、乳ばなれと同時に神にささげる事にした。祈りの間に、子供に対する母親のエゴからきよめられ、神から託された責任と、子供の生涯の価値、使命ということを中心に考えるようになったのだ。

2月25日 今日の通読箇所 サムエル記上2：1～11

サムエル記上 2章1～11

これは「ハンナの歌」として有名なもので、ルカ2章の「マリヤの歌」のお手本となったとも言われる。この歌のテーマは「神は弱く低い者の祈りに答えて、これを祝福し、助け、救いと勝利に導いて下さる。これに反して、神は高ぶる者を恥じしめ、最後に、敗北と滅亡におとし入れる」という真理であって、ハンナの実際に経験したところであった。「神は高ぶる者をふせぎ、へり下る者に恵みを与え給う」という、新約のみ言も思い合わされる。

2月26日 今日を通読箇所 サムエル記上2：12～26

サムエル記上 2章12～26

士師時代は宗教的・道徳的に最低であって、その結果自然に人々の政治、経済、生活は最低となったが、礼拝と信仰を指導するはずの祭司たちの最低の姿がここに見られる。彼らの責任は重いと言わなければならない。彼らは祭司の制服を着て神殿にいたが、神にも仕えず人にも仕えず、エリは怠慢に、ホフニ、ピネハスらは物慾色慾に仕えていたのであって、人々は神殿や礼拝をきらうようになった。我々も主に奉仕する者として、本当に反省させられる。

2月27日 今日を通読箇所 サムエル記上3：1～14

サムエル記上 3章1～14

これは「信仰の従順」を学ぶ大切な章である。エリの神殿は、サムエルが信仰と礼拝を学ぶのに決してよい環境ではなかった。エリはよい指導者ではなく、ホフニとピネハスはよい先輩ではなかった。しかしサムエルは母の命に従ってここにいた。エリに対しても、夜中に3回でも起きる程従順だ。勿論神に対してもまた然りで「しもべは聞きます。主よお語り下さい」の祈りは、サムエルが献げてこそ本当だったのだ。これが彼の尊い生涯の出発であった。

2月28日 今日を通読箇所 サムエル記上3：15～21

サムエル記上 3章15～21

サムエルは神から預言者として任命を受けたが、当時祭司も預言者も、信用はゼロで、こりごりしている人々の中に、自分でそれをふいちょうして見ても、なかなか人々はすなおに信用し、尊敬し、服従してくれなかったと思う。しかしついにダンからベエルシバまで、人々がサムエルを主の預言者とさとり、サムエルによって、主のことばが、あまねくイスラエル全地におよび、やがて大いなる信仰復興につながって行った、その秘密は19節以下に記されている。